第13回大会講演要旨（平成16年7月3日）

「菊の意匠は鎌倉時代の硯箱にすべて含まれていた」

昭和女子大学教授　灰野昭郎

私は大学を出てすぐに、鎌倉国宝館という鶴岡八幡宮の境内にある博物館に勤めた。若い学芸員であった私が最初に手にした国宝が、菊の文様であった。

国宝「沃懸地（いかけじ）籬（まがき）菊螺鈿蒔絵硯箱」。

この硯箱は源頼朝が後白河法皇から下賜されたものと伝えられる、唯一鎌倉時代の遺品である。蓋表（ふたおもて）・蓋裏・身込（みこみ）・懸子（かけご）、いずれも文様は垣と小鳥と菊。ただ、その蒔絵技法によって変化をつけている。さらに内容品の水滴、筆、刀子（とうす）、錐（きり）、墨柄（すみえ）は銀製。これにも菊花が刻されている。硯箱の遺品としては最古の完璧なものといえる。国宝指定はしごく当然な遺品である。

これらの菊の意匠を分析すると五種類の菊の表現であるといえるのだ。上に図解したが、「表の菊」（図①）、「側面の菊」（図②）、「蕾」（図③）、「裏の菊」（図④）、「菊花散（ちらし）」（図⑤）。

実はこの硯箱には硯箱の道具でないものが納められている。鋏（はさみ）、毛抜（けぬき）、眉作（まゆづくり）など手箱（てばこ）の内容品なのだ。材質、意匠は硯箱のものと同じ「菊花散」なのである。手箱とは神の化粧道具を納め、神社に奉納したもの。この手箱は硯箱と一対をなすもので、江戸時代の文献には鶴岡八幡宮の神宝として有名なものであった。俗に「政子

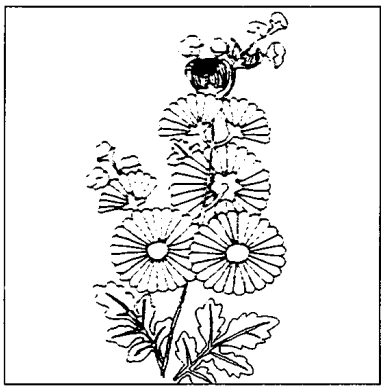

図 ①, ②, ③, ④

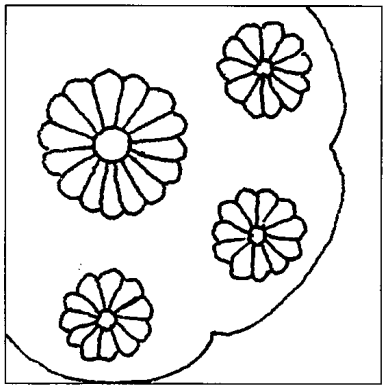

図 ⑤

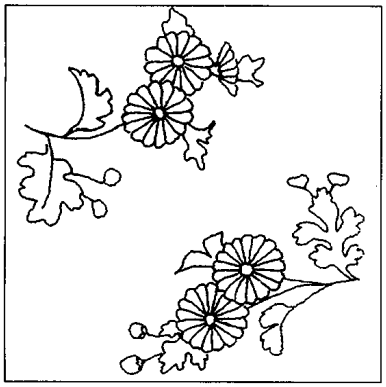

図 ⑥

の手箱」と呼称されていたらしい。この手箱は明治六年ウィーンで開催された万国博覧会に出陳され、帰路伊豆沖で積載船が沈没し、不帰の遺品となった。ただ幕末にこの手箱は修理されており、この時細部にわたり、くわしく絵巻に描かれている。これをみると、手箱の内容品は完全に揃っており、これらには多くの「枝菊（えだきく）」（図⑥）が散らされている。硯箱、手箱で六種類の菊の意匠が表わされているのだ。現在でもこれら六種以外の菊の表現はない。鎌倉時代にすでに菊の意匠は完璧なものであったのである。